〈研究論文〉

戦時下における生活綴方運動の展開と変容

高　橋　健　司*

1. はじめに－生活綴方運動史の「空白期」を巡って－

戦後60年を経て戦争体験者が減少する現在，戦争体験の風化を危惧する声の高まりと共に，その記憶を次世代に継承していく方法が模索されている。私はそれを社会科教育，歴史教育の課題として捉え，戦争体験の記録の掘り起こしを進める中で，戦時下の子ども達の生活を綴った綴方集，『銃後綴方集　父は戦に』(1)と『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』(2)に出会った。ところが，このような綴方集は従来の生活綴方運動史からは見落とされてきたものであり，社会科教育の中で未だ十分に検討されていない。

『社会科教育辞典』によれば，生活綴方とは「生活の中の生々しい現実やそれをめぐっての考えや感情を，文章でありのままに書くことによって生まれた子どもの作品」を教材とし，学級集団による検討を経ることで，「ものの見方，考え方，感じ方」の深化と共有化を図る教育を指す。その出発点となったのが1929（昭和4）年に創刊された，生活の重視と教育の改造を主張した『綴方生活』であり，これ以降，全国各地に多様な実践と理論が勃興し，『北方教育』や『工程・綴方学校』等，多くの文集と研究誌が発行されて生活綴方運動が盛り上がりを見せたが，「戦争下の弾圧によって生活綴方運動は息を止められて」しまい，「戦後の自由な風潮の下で，生活綴方教師たちは，1950（昭和25）年に日本綴り方の会を結成し，無着成恭『山びこ学校』などを契機として運動を復興させた」とされる(3)。

このように，社会科教育において生活綴方運動は，昭和初期の隆盛期，戦後の復興期という二つの時期に分類されて認識され，戦前と戦後の生活綴方運動の間には，戦時期という「空白期」が横たわる。そして，この「空白期」をもたらした「戦争下の弾圧」とは，1940（昭和15）年2月から1944（昭和19）年にかけて生活綴方運動に携わる教師が多数検挙された「綴方教室事件」と呼ばれるものであり，これについて『北方教育』を創刊するなど，戦前・戦後の生活綴方運動に携わった滑川道夫は，「『生活綴方』弾圧事件によって，日本の綴方教育界は，火の消えたように活気を喪失したばかりでなく，綴方教育実践そのものを回避する傾向さえつよめていった。これに代わって，戦地の兵隊さんへの慰問文，皇軍勝利をたたえる綴方，軍馬・軍犬をたたえる綴方，出征兵士を送る綴方が表層におし出されていった」と記し，「『生活綴方』は表層からは消えたが，深層に沈潜して，戦後の民主主義のなかに生気をもってよみがえってくるのである」と評して(4)，戦時下の綴方は，戦意高揚のための綴方と見なされている。

そこで本稿では，戦時下における生活綴方運動を，前述の二つの綴方集に掲載された綴方の分析と比較を通して考察し，歴史教育の立場から戦時期の綴方を取り上げる意義と可能性を論じたい。

2. 日中戦争下における生活綴方－『銃後綴方集　父は戦に』の分析をもとに－

長期化する日中戦争下の1940（昭和15）年9月，『銃後綴方集　父は戦に』は新潮社より出版された。編者は児童文学作家の坪田譲治で，

＊朝日大学

坪田は前年に「ペン部隊」の一員として中国での戦いの模様を視察したことを契機に，帰国後，「勇士子弟の綴方を集め，それを編纂して出版するといふこと」を企画した[5]。その際，『工程』（1937年『綴方学校』に改題）を創刊するなど，当時の生活綴方運動の中心的存在の一人であった百田宗治の協力を得て，全国の100の小学校の「綴方指導の名手」とされる教師に綴方の募集を依頼し，このうちの80校から送られてきた2千数百篇の綴方の中から，34篇を選んでまとめたものが『銃後綴方集　父は戦に』である。

資料1は，この34篇の一覧であるが，1年生から高等科2年生まで，各学年から3～7篇が選ばれ，鹿児島（9篇），新潟（3篇）など，21道府県の小学生の綴方が掲載されている。

その内容は，父や兄など近親者の戦死・戦病死について綴ったものが最も多く，全体の約4割の13篇（No.1,4,5,9,14,16,17,19,24,27,28,31,32）にも上る。また，出征後の家族の暮らしを綴ったものが10篇（No.10,18,20,21,22,23,25,29,30,33）を数え，召集される肉親の姿や出征を見送った際の様子を綴ったものも6篇（No.1,3,10,12,15,26）ある。これに対し，慰問文は4篇（No.2,6,8,34），戦勝を称えるものは僅かに1篇（No.11）である。

そこで，掲載数の多い順に(1)　戦死・戦病死の綴方，(2)　銃後の暮らしの綴方，(3)　召集・出征の綴方と分類し，それぞれ内容を検討する。

(1)　戦死・戦病死の綴方

『銃後綴方集　父は戦に』の特徴である，出征した父や兄の死について綴った文章の多さは，1937（昭和12）年の盧溝橋事件以降，戦闘が中国との全面戦争へと拡大する中で，出征兵士の中に多くの死傷者が出たことを物語っている。では，出征した父や兄の戦死という重大な出来事を，子ども達はどのように綴ったのであろうか。

資料3は，鹿児島の2年生である木村妙子が綴った「とうちやんのこつむかえ」（No.5）と題する綴方である[6]。この中では，戦死した父親の遺骨が帰還し，それを駅まで迎えに行った時の様子，自宅で写真の中の無言の父と対面した時の様子が，切々と綴られている。そして，悲しみをこらえ「きばつて」いる少女に対し，母親は「とうちやんは神様になつて，やすくにじんじやにゐる」と諭し，「私はとうちやんも，きつとうれしいと思ひます」と結んで終わる。このように，家族全体が大きな悲しみに包まれた様子が綴られ，「神様」になった父が「うれしい」と思うことで，父の死を自らに納得させようとする少女の姿が，読者の胸に迫ってくる。

また，和歌山の5年生，垣内花枝が綴った「靖国神社の父を想ふ」（No.14）でも同様に，「だいじなだいじなお父さん。何度もゆめにみたお父さんが，とうとう遺骨になつて，かへる時」に，「お父さん死んだと聞いた時，お母さんは泣いたけど，二三日してからお母さんは言ひました。『あんまりかなしんでもしかたない。我家だけとちがふもんなー。前から戦死した遺族の人にもすまんしなー　お父さんは靖国の神さんにしてもろたんやさかなー』と言ひました。そのお父さんに，こんど三月に九段坂で面会できるんですから，私はうれしくてうれしくてたまりません」と，父の戦死という厳しい現実に直面して，父が「靖国の神さん」となったと思うことに慰めを見出し，最後には父との「再会」を喜ぶ姿が綴られている[7]。

このような，遺族が戦死の悲しみを受容する姿を綴ったものがある一方で，戦死の知らせを聞いた際に感じた衝撃の大きさを，率直に綴ったものもある。広島の5年生，栗原傳三の「兄の戦死」（No.16）では，「学校から昼御飯を食べに帰つたら皆んなでちらかつとるおへやをかたづけてをられた。僕が『どうしたん』ときいても誰も何も言つてくれなかつた。母はくどの前で目を真赤にしてゐた。『どうしたん』ともう一ぺん聞きかへすと『兄さんが死んだんどう』といはれた。僕はすぐ声をあげて泣いた。親類の人が『傳ちやん，飯をくはんか』といつてく

れた。僕は泣き泣き『くはん』といつた。母が涙声で何んか言つたがよく分からなかつた。大きい姉も目を真赤にしてゐた」と，兄の戦死の知らせを聞いた時の様子を詳細に綴っている[8]。

そして，大阪の6年生，藤田宇三郎も，兄の戦死を学校で伝えられた時の様子を「戦死の知らせ」(No.24) の中で，「三戸先生がまつさおな顔をして入つてきた。僕はからだがかたくなつた。三戸先生はみんなまつておれと言われた。僕はいすに坐った。三戸先生がまつさほな顔をしてゐるから，さうとうきつく叱られるだらうと思つて，珠算の時におとなしくしたらよかつたと思つた。先生は僕の前を通る時ほそい目で少し笑つた。僕がこわがつてゐるのに三戸先生が笑つてゐるので三戸先生は叱らないような気がした。先生は教壇の上から藤田とよんだ。僕はこわかつたが叱るやうでなかつたので笑ひ笑ひ先生の前に立つた。先生は，あをいじろじろした眼でじつと僕の顔をみつめながら，兄さんは戦死したぞ，今役場につうちがあつたのだと言われた。僕は寒くなつて少しふるへた。うそのやうであつたがむねが一ぱいになつてくる。先生の顔を見ると本とうらしかつた。兄さんの事を思ひ出すと涙が一ぱい湧き上げてくる。僕はみんなにはづかしかつたのでがまんをしてゐたが，涙が湧上げて来るのでがまんがしきれなくなつて来た」と，悲しみが込み上げてくる様子を率直に綴っている[9]。

こうした綴方からは，勇ましさとは無縁の，遺族の悲しみの姿が側々と伝わってくるが，編者の坪田自身，この綴方集が「幾分暗い感じを読者に与える」ことを認めており，それが「吾国銃後児童の明朗闊達なる姿と，その勇壮なる心意を表現するに足りないといふ批評」を招きはしないかと危惧さえしている。しかし，坪田は「私はこの本を以て，銃後精神の自粛自戒の力としたかつたからであります。買溜め，売惜しみ，闇取引，華美贅沢と，銃後には国策に反くもの少くありません。私はこれらの綴方の中から，それら国策背反の人心に対する血に染む怒りの声を聞いたのであります。それを私は世の人々に伝へたかつたのです」という意図を明らかにすることで，刊行に対する理解を求めている[10]。

(2) 銃後の暮らしの綴方

次に，『銃後綴方集　父は戦に』の中で綴られた銃後の暮らしとは，どのようなものであったのだろうか。

和歌山の4年生，江木眞美子が綴った「お父さんが召集されてから」(No.10) では，父が召集された後，母が倒れ，亡くなってしまった時の様子を次のように綴っている。「あるとき，日曜日にお父さんは家へかへることをゆるされてきました。そのすこし前から病気でねてゐたお母さんは，ねまから起き上がつてお父さんのかほばかり見てゐました。お父さんもだまつてお母さんばかり見てゐました。私はまどのところに立つてゐました。そのうちに，『しつかりせよ。しつかりせよ。』と言ふこへがしましたので，私はびつくりしてねまへ走つて行きますと，お母さんはしたを向いてたふれてゐました。『お母さんお母さん。』とつづけて言ひましたが，お母さんは何も言はれませんでした。お母さんはとうとうなくなられたのでした。するとお父さんは，『なくな，なくな。お父さんがかへつてきてゐるじやねえか。』と言はれました。私はよけいにかなしくなつてなきました。あくる朝，お父さんはすぐ隊へかへることになりました。みなさんにおねがひすることを紙に書いて，かべにはりつけて出て行かれました。私はおみおくりに出ましたが何も言へませんでした」[11]。

また，兵庫の6年生，唐一一の「宮参り」(No.20) では，出征した兄のために母と神社に祈願に行った時の様子を，「不意にお母さんが，しんみりとした声で，『一一つよ，兄さんが手柄を立てて死んでみい，もう兄さんの姿を見よ思つても見られへんのやで。』と言われた。僕は兄さんが家に居た時の事を思つて居たので，母

の声に『はつ』とした。『兄さんが死ぬ。』僕は急に胸がつかへて涙が出そうになつて来た。『兄さんは死ぬもんか，手柄を立てて，帰るんやで』と言はうとしたが，泣き声が出そうでどうしても言へなかった」と綴っている[12]。

さらに，岡山の6年生，本多信一は「母の心配」(No.25) の中で，しばらく戦地の兄からの便りがなく「それからといふものは母は，お百度を毎朝，毎晩ふんでをられたが，あまり心配しすぎて，病気となつた。母の病は日一日と，重くなつたが，十日程してから，兄が○○(ママ)で小包を受け取りましたといふ便りをよこした。その手紙を母がみて，安心した様な顔をして笑つてゐたが，五日程してから全快してしまつた。母や姉のその時の心配は大したものであつた。母は全快してから，『ひどう心配しちやあいけん』と度々人に話してゐた」と，戦地の兄の安否を気遣い，心労のあまり病となった母の姿を綴る[13]。

他にも，鹿児島の高等科1年生の藤井久子の「兄さんへのかげぜん日記」(No.30) など，銃後の暮らしの綴方からは，出征兵士を送り出した後の家族の厳しい暮らしの様子や，戦地の父や兄の身を案じ無事を祈る家族の姿が浮かび上がってくる。

(3) 召集・出征の綴方

では，『銃後綴方集　父は戦に』の中で子ども達は，召集令状を受け取った時の様子や，父や兄の出征を見送った時の様子を，どのように綴っているのだろうか。

「万歳万歳と叫んで元気よく御見送りをしました」という[14]，大分の6年生，八坂トシ子の「父の出征」(No.26) のような綴方もある一方で，前述の「お父さんが召集されてから」(No.10) では，召集令状が届いた時の様子を，「私はむねがどきどきしてきました。するととなりの子どもが四五人，『江木さん召集やいしよ（だよ）。』と言つて家の前へつめかけてきました。『ほんとに早くきたなあ。』とお母さんが言つて，やつぱりおどろいたやうすでした。そこへお父さんがかへつてきて，『まだ来ん（こない）と思つてゐた。』と言ひました。みんな召集の赤い紙をかこんでだまつてゐました。しばらくするとお父さんは弟に，『お父さんは兵隊さんになつたよ，一二と(ママ)と行くんだよう。』と言はれました。『どこへ行くのやう。』『北支やと思ふけど。』『すぐやろか，すぐでないとよいが』とお母さんはお父さんと話してゐました。そのばんは，いつまでもねむらないで，起きてゐました。（中略）私はねまにはいつてからでも，なかなかねむれませんでした。いつまでもお父さんのことを考へたり，せんさうのことを考へたりしてゐました」と，不安な心境を率直に綴ったものもある[15]。

また，熊本の1年生，サカタカシ子の「ニイサン」(No.1) では，「ニイサンガ　ウチヲ　デヤウ　ト　スル時，オカアサン　ハ　ホトケサン　ニ　オアカリ　ヲ　ツケマシタ。五日前カイグン　ノ　ニイサン　ガ　シニマシタ　マタ　ハヤタニイサン　ガ　イクノデス。オカアサン　ハ　泣キマシタ。私タチ　ハ　クニヲ　出テカラ　ノ　ウタ　ヲ　ウタッテ　イキマシタ。キタカゼ　ガ　フイテ　ヰマス。ウミ　ハ，白ナミ　ガ　ヨセテ　ヰマス」と，戦病死した兄の葬式の直後に，もう一人の兄の出征を見送るという家族の悲痛な姿が綴られている[16]。

このように，家族の召集・出征という，表立っては「晴れがましく」振舞うことが求められる場面でも，子ども達はその実態を見据え，家族を見舞った厳しい現実を率直に綴っており，まさに日中戦争下の生活を「ありのままに書く」綴方であったと言えよう。

3. 太平洋戦争の開始と生活綴方の変容
―『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』との対比を通して―

太平洋戦争の開始から約半年後の1942（昭和17）年7月，『銃後綴方集　父は戦に』の編集

に協力した百田宗二が自ら編者となり，新たに『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』が，アルス社より新日本児童文庫の第21巻として出版された。この綴方集は，1937（昭和12）年7月の「支那事変」勃発後，「最近」までに編者の百田の手元に集まった約1000冊の全国の学校・教室の文集の中から，35篇の「愛国詩」と49篇の「愛国綴り方」を選んで掲載したとされるが，「愛国綴り方」のうち，後述する2篇は『銃後綴方集　父は戦に』に掲載された綴方の再録であり，百田が坪田に協力して集めた綴方も併せて再編集した，その後継の綴方集に相当する。

百田によれば，『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』の詩と綴方は，「綴り方として，或は詩としてすぐれたよい姿勢の出てゐるもの」であることに加えて，「銃後の少国民のよみものとして，子供たちがお互いに読み合つて，この未曾有の聖戦下に各々の執るべき心構へ，用意，生き方といふようなものを，興味と共に自発的に反省し合ひ，誘導し合へると思へるやうな作品」とされ[17]，新たな戦争の開始という時局の変化を意識して編集されたことが分かる。

資料2は，「愛国綴り方」49篇の一覧であるが，1年生から高等科2年生まで，各学年から2～14篇が選ばれ，東京（11篇），鹿児島（10篇），新潟（9篇），岐阜（4篇）など，14の都道県と，満州，台湾，朝鮮の3つの「外地」からの綴方が掲載されている。

また，「愛国綴り方」は百田によって4つに大別されて，それぞれ「御神火　支那事変と私たち」（No.35～51），「銃後にきたへる」（No.52～65），「靖国の神に」（No.66～75），「大東亜戦争」（No.76～83）と見出しが付けられ，特に4番目の「大東亜戦争」においては，太平洋戦争の緒戦の勝利を称えた戦勝の綴方が8篇（No.76～83）も登場して，戦意高揚のための綴方が盛んになっていく様子が窺える。一方，慰問文の形をとった綴方は4篇（No.36,38,41,44）と多くはないが，これは，慰問文は「殆ど個人差というほどのものもない単一な形式」で書かれたものという，百田の綴方観を反映していると言えよう[18]。

そして，「愛国綴り方」においても，依然として戦死の綴方，銃後の暮らしの綴方，出征の綴方を見ることが出来るが，それらは『銃後綴方集　父は戦に』で見た綴方とは，大きく異なっている。では一体，どのような変化が生じたのであろうか。以下の3点について比較・検討したい。

(1) 戦死の綴方の変容

「愛国綴り方」の中でも，戦死の綴方は多数取り上げられており，「靖国の神に」と名付けられた10篇（No.66～75）に加えて，「遺品展覧会」（No.49）と「真珠湾の九勇士」（No.83）の合計12篇が該当し，その数は全体の約4分の1に当る。

この中で注目に値するのが，資料4の鹿児島の2年生，木村妙吉作の「とうちやんのゐこつ」（No.67）である[19]。資料3の『銃後綴方集　父は戦に』の中の木村妙子作「とうちやんのこつむかえ」（No.5）と比べると分かるように，この綴方は作者名を変えて再録されたものである。ところが，それは単に作者名が変えられただけではなく，編者の百田によって内容の改竄が加えられている。「とうちやんのゐこつ」（No.67）では，遺骨を迎えに行った駅で，祖母が泣きながら母と会話し，母もなきそうな顔になったという箇所が削除されて，家族の悲しみの姿が抑制され，さらに，作者が戦死した父の写真に話しかける箇所も削除されて，「悲しみに負けない」綴方へと仕向けられている。

これに対して百田は，「解説と批評」の中で，「作品によつては，編者みづから一々それを手写しながら，多少の改竄を加へて行なつたものもある。これはいろいろの動機や必要からやむなく行なつた」ことを認めており[20]，もはや「愛国綴り方」では，悲しみを率直に綴ることは不可能となったことを物語っている。

さらに百田は，鹿児島の3年生，仮屋崎實男が，「とうとうお父さんのゐこつがかへつて来ました。ほんたうに死なれたのだと思ひました。さかんなおさう式をしていただきました。僕はおはかのまへに行き，『しつかり勉強して，りつぱなあとつぎの軍人になります。』と言ひました。（中略）僕はお父さんが生きていられた時にたてられた，山先田の水車小屋にあそびに行きます。ごとごとまはる水車のそばの草原にねころんで，高い空を見ながら，飛行機のことを思ひます。そして今に立派な飛行機の軍人にならうと思つてゐます」と綴った[21]，「父は靖国に」（No.69）の批評の中で，「この方はよほど文学的である。それだけに前の『とうちやんのゐこつ』などにくらべて切々と胸を打つところが多い」と評すなど[22]，より「前向き」な遺族の姿を綴った文章を称えてさえいる。

この他，「天皇陛下のおんために，喜んで，勇ましく戦死をなさつたのです。悲しんでばかりゐては，立派な最期をとげられたお父様に申しわけがありません。私も弟も立派な正しい人となつて，お父様のかはりに，天皇陛下に忠義をつくします」と綴った[23]，朝鮮の4年生，青木秀子「靖国のお父さま」（No.71）についても，百田は「遺族の蘇生を綴った力強い銃後の綴り方の一つ」と評しており[24]，遺族による戦死の綴方は，このような悲しみを「克服」する姿を綴るものへと，大きく変貌している。

また，12篇中，遺族の綴方は半分の6篇（No.67,69,70,71,73,75）にすぎず，残り半分は遺族ではない子ども達が綴っており，例えば，島根の2年生，山本妙の「やす国じんじやの神様に」（No.66）では，「やす国じんじやの神様，ありがたうございます。私たちが，かうして学校へ行くことが出来るのは，みんな戦死をして下さつた兵たいさんのおかげであります。（中略）兵たいさんが，しんでもよいと思つてたたかつて下さつたから，日本が勝つたのです。こんなつよい，ちゆうぎな兵たいさんが，神さまになつて日本をまもつて下さいますから，日本はまけるやうなことはありません」と靖国神社に祀られた戦死者を称え[25]，さらに東京の5年生，笈田郁夫の「真珠湾の九勇士」（No.83）では，真珠湾の攻撃で戦死した「九軍神」を称えて，「戦に勝ち抜くためには，このやうな忠義な兵隊さんたちのぎせいが，これからもたくさんあるだらう。天皇陛下のおんために死んで行くのだ。家にゐて畳の上で死んでは申しわけがない気がする。僕たちも大きくなつたら，このような人たちを見ならつて，りつぱに陛下のおやくに立たなければならないと思つてゐる」と，その「勇壮」な決意を表している[26]。

このように戦死の綴方は，家族の死という個人的な体験の範疇を超えて，戦死者を顕彰し「手本」とする綴方へと変容し，遺族の悲しみなど戦争の遂行に消極的な態度と見なされたものは，綴方の中から排除されていったと言える。

(2) 銃後の暮らしの綴方の変容

「愛国綴り方」では，「御神火　支那事変と私たち」の中の5篇（No.40,44,46,50,51）と，「銃後にきたへる」の14篇（No.52～65）の合計19篇において，銃後の暮らしが綴られ，特に後者の「銃後にきたへる」と名付けられた綴方は，心身の鍛錬（No.52,53,56,58,63），資源の節約（No.54,55,59,60,64），食糧の増産（No.57,62,65），隣組・隣保組の協力（No.61,65）の四つに分類することが出来て，いずれも国家総動員体制下の社会における「模範的」な暮らしを綴る内容となっている。

その一方で，『銃後綴方集　父は戦に』に見られたような，出征兵士の家族の生活の厳しさや，出征した子どもを気遣う母の姿を綴ったものは姿を消し，ここでも大きな変容を遂げていることが分かる。

それは，文字通りの総力戦となった時代状況の中で，銃後の暮らしの隅々にまで統制が及ぶようになり，綴方に対しても国民生活の「規範」が強く求められた結果，もはや「生活の生々しい現実」を綴る余地がなくなったことを表して

いる。

(3) 出征の綴方の変容

「愛国綴り方」では，出征について綴ったものは，「御神火　支那事変と私たち」の中の3篇（No.37,47,48）と少ないが，戦死の綴方や銃後の暮らしの綴方と同様に，出征という「ハレ」の舞台においても，戦意を削ぐようなものは綴方から排除されていく。

その実例として，前述の「とうちやんのゐこつ」（No.67）と共に『銃後綴方集　父は戦に』から再録された，資料5の「三龍丸の出征」（No.47）について見たい[27]。この綴方は，鹿児島の5年生，岩田三郎が，兄と共に出征する徴用船「三龍丸」の出航の様子を綴ったもので，『銃後綴方集　父は戦に』の中の「三龍丸の出征」（No.15）から「別れのいはひ」の様子が削られた他は，ほぼ同文である。百田の批評によれば，これは出征の「感動を具象化して書いた」綴方とされているが[28]，最初に「三龍丸の出征」（No.15）が掲載された際には，資料6の岩田三郎の弟，岩田昭の「うられた三龍丸」という，帰還した後に売却された「三龍丸」についての綴方も併せて掲載されていた[29]。

これについて，岩田兄弟を指導した教師の吉嶺勉は，「『三龍丸の出征』の綴方について」と題する文章の中で，「私にとつて，この御用船三龍丸の消長は，興味深かつた。あの出征の日の，三郎たちの心からの誇りは，ぴんとつき出した，やりけんづくりの舳の尖りであつた。しかも激しく尊い試練を経て来た三龍丸の舳のやりけんづくりは，みごとに切り取られて，ありし日の威容はなく，船体はただ一色に黝く塗りきつてあつた」と記し，「敵弾に傷つき，機関の疲労した漁船」が売却されたことに対する感慨から，弟の昭が綴った「うられた三龍丸」を兄の綴方と共に掲載したことが分かる[30]。

このように，当初は，勇ましい出征とは対照的な「消長」について言及されていたにもかかわらず，「愛国綴り方」として再録された「三龍丸の出征」（No.47）では，「うられた三龍丸」に関する部分が伏せられて，「勇壮さ」を強調した綴方へと再編集されている。

そして，鹿児島の2年生，西元幸雄が「おとうさんのしゆつぱつ」（No.37）の中で，「いくさがはげしくなりました。あちらこちらのおぢさんたちや兄さんたちが，毎日のやうにいくさに行かれます。おとうさんにもくるだらうとまつてをられましたが，十二月七日の日に，とうとう赤いかみが来ました。おとうさんは『さあ，いよいよでかけるぞ。天皇へいかさまにちゆうぎができるぞ。』と，うれしそうに，にこにこしておつしやいました」と綴るように[31]，出征の綴方においても，「模範的」な態度を綴ることが求められるようになったと言える。

4. 戦時下の生活綴方の位相

児童文学者の山中恒は，『銃後綴方集　父は戦に』について触れ，「戦意昂揚の作文というよりは，何か反戦の悲しみを訴えているようにしか思えない」，「この時期によく，こんな作文を掲載した綴方集が出版されたものだ」としながらも，編者の坪田が，綴方を「反戦の意識で採用したとは思えない」，「汚れなき童心を讃えることで，おとなを国策にそわせるべく，叱咤激励の材料にした」，「『子どもたちはこれほどけなげに戦争に協力しているのだ，だからおとなは国策違反などせず，もっと真剣に戦争に協力せよ』という，戦争をやらせる側に立っての材料にしてしまった」と批判して，この綴方集は「子どもであるということが権力側の道具となることを示している」と評する[32]。

また，文学史を研究する川村湊は，『銃後綴方集　父は戦に』の綴方について，「『生活綴方』がその特徴である『暗い感じ』を持っていながら，それが『銃後綴方』として通用するということを示している」とする[33]。

これに対し，作文・綴方教育史研究の中で，戦時下の綴方に触れたものは，ほとんど見当たらず，管見によれば，僅かに根本正義の「戦時

下の綴方と坪田譲治」が挙げられる程度である[34]。この中で根本は,『銃後綴方集　父は戦に』を取り上げ，その位置付けを試みようとしているが，前述の山中の批評を引用して支持するのみであり，十分に検討されているとは言えない。

確かに山中が批判するように，生活綴方運動に対する弾圧が推し進められていく中,『銃後綴方集　父は戦に』が出版された背景には，戦争遂行という国策に沿った形で，生活綴方を存続させようとする政治的意図があったことは想像に難くない。そして,「銃後精神の自粛自戒」という大義名分の下に，銃後の生活綴方は「通用する」と考えられたのも事実であろう。

しかし，僅か2年足らずのうちに,『銃後綴方集　父は戦に』に代わる『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』が登場し，綴方が大きく変貌を遂げたのは，前者のような従来の姿勢の生活綴方では，太平洋戦争下において通用しなかったことを，如実に物語っている。それは坪田の予想通り，肉親を失う悲しみの大きさや銃後の暮らしの厳しさの滲み出る綴方では戦意高揚にならず，むしろ戦争遂行に消極的と映ることが問題視されたと言えよう。

その結果，新たな「手本」となるべき綴方集が必要となり，当時，国民学校の綴方指導要領の作成に携わるなど，綴方教育の指導的立場にあった百田が,「勇壮なる心意を表現する」綴方を再編集して示し，積極的な戦争協力の姿勢を鮮明にしたと考えられる。

それゆえ，戦時下の綴方を一括りにし，単なる戦意高揚の綴方として生活綴方から排除するのではなく,『銃後綴方集　父は戦に』の綴方を，日中戦争下の子ども達が，時代の制約を受けながらも，切実に銃後の生活を綴った貴重な戦争体験の記録として位置付け，同時に『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』の綴方も，太平洋戦争下での生活綴方運動の帰結として，銘記する必要があるのではないだろうか。

5.　歴史教育と戦争体験の継承

現在，歴史教育において，戦争学習の在り方が大きく問われている。その背景には，地域から戦争体験の教材化を図る外池智が，従来の戦争学習を支えてきた「父母，祖父母といった身近な人たちの戦争体験」が消失し,「戦争の『ドラマティック』な面だけが強調されがちな『戦争物語』類が横行」する中で,「子ども達が『戦争の惨禍』を追体験することが困難になってきている」と指摘するような[35]，戦争体験の風化に対する教育現場の危機感が存在する。

こうした現状の中,『銃後綴方集　父は戦に』の綴方は，戦争学習において，何ら「ドラマティック」ではない，身近な日常の暮らしに降りかかる戦争を考察する，貴重な手掛かりを与えてくれる。そこには，家族を残して出征する兵士となった父や兄の姿や，戦場での肉親の安否を気遣う家族の姿，そして肉親を失った遺族の悲しみの姿が切々と綴られ，現在の子ども達にとって，まさにそれは「等身大」の戦争の記録である。

特に，この中の戦死の綴方は,「戦死を称える」ことの意味を鋭く問い掛けるものであり，戦争体験の記録を掘り起こして研究する大濱徹也が,「死はきわめて個人的なこと」であって「死者の思いは，国家が一方的に解釈し，排他的に意義づけて価値を付与するなかで生かされるのではなく，死者につらなる人間の内なる世界にのみありつづけるもの」と述べるように[36]，このような肉親の戦死を綴った子ども達の戦争体験を，歴史授業で語り継ぐことを通して,「死者の悲痛な叫びを追体験する」[37] 戦争学習が，可能となるのではないだろうか。

本稿では，その具体的な学習の方法を開発するまでには至らなかったが，これから実際に教材化・授業化を図り，授業実践を行なって検証する作業が残されている。また,『銃後綴方集　父は戦に』が成立する前提には，多様な銃後の生活を綴る綴方教育が，各地の学校において展開されていたはずであり，それがどのような

ものであったか，十分に解明出来ていない。長引く日中戦争によって増え続ける戦死者が身近な時代状況の中で[38]，子どもの綴方が投げ掛ける戦争の問題に，綴方教師は向き合うことが出来たのか等，地域での戦時下の綴方教育の実態を明らかにしていくことを，今後の課題としたい。

〈註〉

(1) 坪田譲治編『銃後綴方集　父は戦に』新潮社，1940。
(2) 百田宗治編『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』アルス，1942。
(3) 日本社会科教育学会編『社会科教育辞典』ぎょうせい，2000，2頁。
(4) 滑川道夫『日本作文綴方教育史3　昭和篇Ⅰ』国土社，1983，514頁。
(5) 坪田編，前掲書，280頁。
(6) 木村妙子「とうちやんのこつむかえ」坪田編，前掲書，27－29頁。
(7) 垣内花枝「靖国神社の父を想ふ」坪田編，前掲書，99頁。
(8) 栗原傳三「兄の戦死」坪田編，前掲書，112－113頁。
(9) 藤田宇三郎「戦死の知らせ」坪田編，前掲書，174－175頁。
(10) 坪田編，前掲書，289頁。
(11) 江木眞美子「お父さんが召集されてから」坪田編，前掲書，70－71頁。
(12) 唐一一「宮参り」坪田編，前掲書，141－142頁。
(13) 本多信一「母の心配」坪田編，前掲書，190頁。
(14) 八坂トシ子「父の出征」坪田編，前掲書，199頁。
(15) 江木眞美子「お父さんが召集されてから」坪田編，前掲書，66－67頁。
(16) サカタカシ子「ニイサン」坪田編，前掲書，4－5頁。
(17) 百田編，前掲書，225頁。
(18) 百田編，前掲書，226頁。
(19) 木村妙吉「とうちやんのゐこつ」百田編，前掲書，170－172頁。
(20) 百田編，前掲書，226頁。
(21) 仮屋崎實男「父は靖国に」百田編，前掲書，175－177頁。
(22) 百田編，前掲書，242頁。
(23) 青木秀子「靖国のお父さま」百田編，前掲書，182頁。
(24) 百田編，前掲書，243頁。
(25) 山本妙「やす国じんじやの神様に」百田編，前掲書，169－170頁。
(26) 笈田郁夫「真珠湾の九勇士」百田編，前掲書，220－221頁。
(27) 岩田三郎「三龍丸の出征」百田編，前掲書，36－38頁。
(28) 百田編，前掲書，229頁。
(29) 岩田昭「うられた三龍丸」坪田編，前掲書，108－109頁。
(30) 吉嶺勉「『三龍丸の出征』の綴方について」坪田編，前掲書，109頁。なお，この中で吉嶺は同じ内容の文章を『綴方学校』（第四巻第二号）に書いたと記している。
(31) 西元幸雄「おとうさんのしゆつぱつ」百田編，前掲書，8頁。
(32) 山中恒『子どもが<少国民>といわれたころ　戦中教育の裏窓』朝日選書218，1982，12－13頁，50頁。
(33) 川村湊「海を渡った『作文』」木村一信編『戦時下の文学－拡大する戦争空間　文学史を読みかえる④』インパクト出版会，2000，45頁。
(34) 根本正義「戦時下の綴方と坪田譲治」同著『子ども文化にみる綴方と作文－昭和をふりかえるもうひとつの歴史－』ＫＴＣ中央出版，2004，61－93頁。
(35) 外池智『地域からみた歴史教育～徴兵の実態と戦争～』ＮＳＫ出版，2001，166－170頁。
(36) 大濱徹也『日本人と戦争－歴史としての戦争体験－』刀水書房，2002，90頁。
(37) 大濱，前掲書，92頁。
(38) 金沢市で入手した『銃後綴方集　父は戦に』は，1940（昭和15）年11月20日に発行された第16版で，表紙の見返しの部分には，蔵書印と共に「2600.12.20. 宇気故長山順次殿村葬の日」と題した「みぞれ，霰，交々に降る寒い冷たい日だつた。英霊を前にしめやかに村葬が営まれる。子供の顔，会葬者の顔に感謝の色。英霊よ安らかに眠られよ。大頭人」という文章が書き込まれており，「皇紀2600年」当時の石川県宇気での戦死者に対する村葬の様子を窺うことが出来る。

資料１　『銃後綴方集　父は戦に』（1940 年）掲載の綴方

No.	綴方名	作者名	学年	学校所在地
1	ニイサン	サカタ　カシ子	1	熊本
2	オトウサンニ	中野　篤	1	山口
3	オトウサン大山秋之助	大山　幸雄	1	山形
4	お父さんの時計	永濱　颯子	2	鹿児島
5	とうちやんのこつむかえ	木村　妙子	2	鹿児島
6	おとうさんへ	山内　惠美子	2	鳥取
7	びやうゐんへ行つたこと	今田　藤枝	3	新潟
8	お父様	木間　良雄	3	山口
9	かはいいトシちやん	渡邊　濱子	3	新潟
10	お父さんが召集されてから	江木　眞美子	4	和歌山
11	漢口かんらくの日	佐野　悦子	4	鹿児島
12	中川さんとお母さん	高橋　ノブ	4	新潟
13	父が帰る	安樂　辰夫	5	鹿児島
14	靖国神社の父を思ふ	垣内　花枝	5	和歌山
15	三龍丸の出征	岩田　三郎	5	鹿児島
16	兄の戦死	栗原　傳三	5	広島
17	お父様を想ふ（靖国神社に参拝して）	田邊　昭子	5	福井
18	からいもうち	長濱　一夫	5	鹿児島
19	兄の戦死	丸山　幸男	5	福岡
20	宮参り	唐　一一	6	兵庫
21	乾草刈り	大崎　甚助	6	兵庫
22	恩賜の煙草	鈴木　喜美子	6	神奈川
23	兄出征中家の生活	鈴木　テツ子	6	神奈川
24	戦死のしらせ	藤田　宇三郎	6	大阪
25	母の心配	本多　信一	6	岡山
26	父の出征	八坂　トシ子	6	大分
27	信雄さん	越智　ヤエ子	高等１	愛媛
28	自爆した叔父さんを懐ふ	齋田　敦子	高等１	福島
29	足袋	白藤　欣四郎	高等１	岩手
30	兄さんへのかげぜん日記	藤井　久子	高等１	鹿児島
31	靖国の父に	山口　義弘	高等１	鹿児島
32	兄の遺骨もらひ	吉松　花子	高等１	鹿児島
33	母の縄なひ	加藤　善一	高等２	山形
34	兄さんへ	番匠　政友	高等２	北海道

資料２　『鉛筆部隊　少国民の愛国詩と愛国綴り方』（1942 年）掲載の綴方

No.	綴方名	作者名	学年	学校所在地
35	五人ノ　セツコウヘイ	本田　和男	1	満州
36	兵タイサン　ゲンキデスカ	二瓶　益衛	1	新潟
37	おとうさんのしゆつぱつ	西元　幸雄	2	鹿児島
38	へいたいさんありがたう	吉野　雅子	2	新潟
39	子どもしんぶん	鈴木　文江	2	岐阜

40	軍たいの庭はき	小野寺　和夫	2	台湾
41	古川君の兄さんへ	大里　仁士	2	鹿児島
42	行け満州へ	棚橋　恒二	3	岐阜
43	御神火	尤　祖蔭	4	台湾
44	こたつにあたらない	渡邊　成吉	4	岐阜
45	校長先生の御帰還	山田　公一	4	新潟
46	同盟国	光岡　敏子	4	東京
47	三龍丸の出征	岩田　三郎	5	鹿児島
48	岩木号の出征	酒谷　進	6	北海道
49	遺品展覧会	福井　セイ子	6	青森
50	わが家の部隊長	腰原　重信	高等１	神奈川
51	支那事変四周年と私たち	平井　森子他２名	3~高２	千葉
52	弓矢	永森　忠治	3	東京
53	建国体操	小笠原　芳雄	3	岩手
54	クレヨンの作りなほし	木村　美代子	4	東京
55	いなごをたべる	清野　武政	5	新潟
56	吹雪の日の登校	井川　徳衛	5	新潟
57	はたらく一家	川村　光男	5	新潟
58	高千穂登山	西岡　健二	6	鹿児島
59	靴	後迫　昭典	6	鹿児島
60	僕の資源愛護	森田　弘	6	岐阜
61	僕等の隣組	藤田　禮一郎	6	鹿児島
62	僕の家の畠	増田　高昭	6	東京
63	僕の体育日誌	的場　堅一郎	6	朝鮮
64	私の作つた代用食	水島　あい子	高等２	愛知
65	隣保組の田植	森田　正作	高等２	兵庫
66	やす国じんじやの神様に	山本　妙	2	島根
67	とうちやんのゐこつ	木村　妙吉	2	鹿児島
68	茅野先生のこと	福田　敦博	2	岡山
69	父は靖国に	仮屋崎　實男	3	鹿児島
70	お父さんの初盆	時崎　俊幸	4	鹿児島
71	靖国のお父さま	青木　秀子	4	朝鮮
72	吉田先生戦死	笠川　善榮	5	福井
73	靖国の父に会ふ日	横山　日佐子	5	東京
74	英霊	内山　公正	6	東京
75	兄の戦死	大垣　喜三次	高等１	鹿児島
76	宣戦布告	杉本　新吉	5	新潟
77	こんどの戦争	目黒　サダ	5	新潟
78	戦争のはじまつた日のこと	岸部　禎廣	5	東京
79	私たちはどうしなければならんか	金井　洋子	3	新潟
80	香港陥落	飯田　悦弘	5	東京
81	マニラ陥落	吉池　良也	5	東京
82	シンガポール陥落	市川　元也	5	東京
83	真珠湾の九勇士	笈田　郁夫	5	東京

資料３　木村妙子作「とうちやんのこつむかえ」（№５）

けふはかあちやんが，とうちやんのこつをもらひに，みやこのじやうにいくのです。のう（佛）さんにおあかりをつけて，みんなでおがむ時，かあちやんが，
「とうちやんが，もどつきやつで，うれしな。」
となみだをながせながらいひました。私はなきたくなりました。とうちやんは，五月三日にどうほうで，しなのたまにあたつてしんでしまひました。かあちやんは，くろいもんつきをきて，くろいおびをしめて，おぢさんときしやでいきました。二時になつた時，ばあちやんと，ていしやばにいきました。かあちやんが，むねに白いはこをだいて，おりて来ました。私はあれが，とうちやんだと思ひました。ばあちやんが，
「かねもつが，もどつたもどつた。」
といつてなみだをだせながら，かあちやんのところへいつて，なきさうなかほで，なにかいひました。かあちやんもなきさうなかほでした。かあちやんは，やつぱりだまつて，私にもなんともいひませんでした。私はなきたくなつたけれども，やつぱりきばつてゐました。うちにかへつた時，とうちやんの前に，花やくだものや，おくわしを上げました。しやしんもかざりました。私もチヨ子ちやんもまさちやんも，みんなとうちやんをおがみました。その時とうちやんの，しやしんは，やつぱりだまつて，私を見てゐました。私は，
「とうちやん。」
と小さいこゑでよんだけれども，とうちやんは，やつぱりだまつて，私を見てゐました。むねのところを見ると，あそこにたまがあたつたのだ，と思ひます。とうちやんが，せんししたから，うちは四人にひんなりました。とぜんねけれども，私はきばつてゐます。
「とうちやんは神さまになつて，やすくにじんじやにゐる。」
とかあちやんがいひます。私はとうちやんも，きつとうれしいと思ひます。私はかあちやんと，いつか，とうきやうにいつて，とうちやんにあふのです。

資料４　木村妙吉作「とうちやんのゐこつ」（№67）

けふはかあちやんが，とうちやんのおこつをもらひに，みやこのじやう（都城）にいきました。のうさん（神さま）におあかりをつけて，みんながをがむとき，かあちやんが
「とうちやんがもどつてきやつて，うれしいな。」と，なきながらいひました。
とうちやんは，五月三日に，どうほうといふところで，しなのたまにあたつてしんでしまひました。かあちやんは，くろいもんつきをきて，くろいおびをしめて，おぢいさんときしやでいきました。
二じになつたとき，ばあちやんと，ていしやばにいきました。かあちやんがむねに白いはこをだいて，おりてきました。私はあれがとうちやんだとおもひました。ばあちやんが
「かねもい（かねもり－父の名）がもどつた。」
といつて，かあちやんのところへいつて，なきそうなかほをしました。かあちやんはだまつて，私になんともいひませんでした。私はなきたくなつたけれども，やつぱりきばつてゐました。
うちにかへつたとき，とうちやんのまへに花やおくわしをあげました。しやしんもかざりました。

とうちやんがせんししたから，うちは四人になりました。
「とうちやんはかみさまになつてやすくにじんじやにゐる。」
と，かあちやんがいひます。私はとうちやんも，きつとうれしいだらうとおもひます。私はかあちやんと，いつかとうきやうにいつて，とうちやんにあふのです。

資料５　岩田三郎作「三龍丸の出征」（№47）

いよいよ家の三龍丸が御用船になつて，支那に出征することになつた。僕は，はとばに行つた。港には油がゆれて，船は埋立地によこづけになつてゐる。
僕が三龍丸にのると，やきだまがまつかになるまで，ぼうぼうとやいてゐる。あたりの埋立地は，見送りの人でぎつしりつまつている。やがてそばにゐる昭栄丸が汽笛をぶうぶうとならしはじめた。
わかれのお祝ひがはじまつた。僕は酒をついでまはりながら兄さんの顔をぢつと見てゐた。兄さんの顔ははりきつて元気いつぱいだ。お父さんや，お母さんや，近所の人たちが，
「しつかりやつておいで。」
と口々にはげましてゐる。兄さんは，
「はい，しつかりやつて来ます。」
と，力づよい声で言つてゐる。僕も何か言はうと思つたが，何だかむねが一ぱいになつて，何も言へなかつた。そこで兄さんにただ礼をしただけで船から下りた。
いよいよ出発だ。三ぞうの船のいろいろの旗が汐風に鳴つてゐる。出るのだ。三龍丸のブリキの柱もきりつとあがつて，やりけんづくりの胴腹に青波をまき起こしながら，堂々と汐をけつて行く。埋立地の人々の旗がさつと上つて，
「ばんざいばんざい。」
の声が，つなみのようにおこつた。船からも兄さんたちがさけんでゐる。やがて三龍丸をはじめ三ぞうの船は，泊の浦を一回まはつて，へさきに白波をわきおこしながら進んで行く。
午後四時すぎの太陽の光にむかつて，まつしぐらに進んで行く。
ああ，あの沖の向かふに上海があるのだ。あの揚子江のにごつた水をさかのぼつて，漢口のへんで，日本の兵隊さんの敵前上陸をたすけたり，弾丸や兵らうをはこんだりするのだ。支那軍の弾丸もとんで来るのだ。
三龍丸よ，しつかりたたかへ。兄さん，しつかりやつて下さい。と僕がいのつてゐるうちに，三龍丸は人魚瀬の向かふに消えてしまつた。

資料６　岩田昭作「うられた三龍丸」

長崎へ六千何円でうられていつたうちの三龍丸，ああ，去年の九月出征して，やうす江をさかのぼつて，兵隊さんたちの敵前上陸を助けた三龍丸。
かへつて来た時は，みよしもつぶれ，横はらに白く「鹿〇号」とかいてあつた。しばらく泊の波止場に，しよんぼりつながれてゐたが，今，長崎で，ぶりをつつてゐるのだ。
もう一ぺん三龍丸の姿を見たいなあ。